Sesame ＝ セサミ

東京 ： 婦人生活社 , 1975－

誌名は、“Open sesame（開けゴマ）!”から「実が弾けるような元気な男の子、ガキ大将」のイメージを広げて名づけたという堀田瑞枝氏。文化服装学院のデザイン科で学びファッションに精通した創刊当初からの編集長である。

創刊は1975（昭和50）年、まさにファッションに興味が深くなる年頃に「An·an」や「Non·no」などの雑誌から影響を受けて育った団塊世代の母親たちが形成する「ニューファミリー」の時代である。ファッション性が衣服のみでなく、食、住の生活全般にわたって追求されるとき、子を介して親も共に成長しながら、健康で、知的に、楽しく個性的センスを養うための情報が盛り込まれたこの雑誌「セサミ」は、まさにタイムリーな発刊であった。季刊から、1978年には年５回、1987年にはさらに年６回発行になる。

1980年代は、高田賢三、三宅一生、山本耀司、川久保玲など、海外でも高く評価されるデザイナーが台頭しDCブランドの波を起こしたが、本誌はすでに、1978年に「デザイナーが提案する子ども服のシリーズ」をスタートさせていた。ラフォーレ原宿に子ども服フロアがオープンした82年には、DCブランドの子ども服を誌面に登場させている。この頃、デザイナー島田順子、金子功、菊池武夫、甲賀真理子、コシノジュンコなどの二世誕生により、DCブランドのファッションショーに子ども服が加わりアピールしたことも手伝って、国内外有名ブランドの子ども服が目立って多くなる。そしてこれらの広告誌面（KENZO ENFAN、Shirlery Temple、Hakka Kidsなど）は、編集誌面の内容と連携してセンスよく挿入されており、本誌の一貫した編集へのこだわりがうかがえる。東京ディズニーランドオープンの翌年、84年から87年にかけては大阪のキッズランドを皮切りに子どもファッション専門のビルオープンが続く。その後も津森千里や田山淳朗、渡辺淳弥などの子ども服がグラビアページを飾り、創刊25周年記念の2000年には、掲載された作品の集大成となる「コドモフクチュール」展が開催され、東京から名古屋、神戸へと巡回した。大人のファッション誌の傾向もあって、本誌子どもモデルもほとんどが外国人だが、日本の文化を伝えるきもののページなどには日本人の子どもが登場している。池田重子は古典的に、日比野こづえはアーティスティックに、丸山敬太はDCブランドのデザイナーらしく、各々に力ある和の着こなしを見せてくれる。

入園入学、新年、クリスマスなど、様々な祝いごとに合わせて掲載される着るものや食べるもの、飾るもの、贈るものなどの情報は親子ともに楽しみながら知識となり、四季折々の祝い膳や菓子、花々、心を込めたものの見かたを高めるとともに、場を踏まえたマナーが身につき、歴史や文化の伝承につながる内容である。1980年代半ばを過ぎる頃からのバブル景気は、アミューズメントパーク、美術館や劇場、水族館、図書館などの設備投資にも向けられた。ゴールデンウィークや夏休みの特集は、国内外を問わずインドアまたはアウトドアで過ごすアイディアと情報が満載で、見て読むだけでも楽しい。旅のグラビアは子どもとファッションを生かしたカメラ目線が斬新で美しく、その地の歴史や芸術、特色を写真とともに解説している。たとえば「バルセロナの旅」（53号）では、

迫力あるサグラダファミリア教会やグエル侯別邸（現ガウディ研究所）が、まるで自分の遊び場であるかのように溶け込んだ子どもたちが撮られている。建築家の説明もわかりやすく添えてあり、また関連してスペインの画家であるミロやピカソも紹介。現地の子どもたちの生活も写真から垣間見ることができる。

セサミジャーナルのページには、子ども向けはむろんのこと、その時々の気になる演劇や美術、講演会、コンサートや映画にいたる情報が載り、一般の大人の雑誌と同様に満足できる。子どもにとって重要な教材でもある絵本の紹介も多く載せているが、1986年に開催された「子どもの本世界大会」と「原画『子ども之友』展」の特集では、誌面に載った挿絵がどれも個性的で魅力的である。時代背景は変わっても子どもたちに向ける希望やメッセージは共感するものばかりで、2回にわたり特集した本誌の意図と姿勢には意味深いものを感じる。また岩合光昭の動物シリーズでは、野生の生物をリアルな美しい写真で見せ、子どもの好奇心が、かけがえのない自然保護の大切さにつながることを教えてくれる。このほか社会問題を取り上げるページでは、環境破壊を危惧し、日常生活の中でできることから実践するためのアドバイスも載っている。子育てでも、環境、健康、精神、教育、人間関係など、その時勢ならではの様々な悩みが生じるが、誌面を通じて共鳴し、解決策を見いだす手立てになるページもあり、見逃せない。

積極的に男性（父親）が参加しているページが多いことも本誌の特徴である。連載エッセー「進展・こどもたちへ！」、そして「父親倶楽部」「おやおやインタビュー」「子育ての時間」「父としての愉しみ」「父親面談」などタイトルは変わってきているが、司会者とゲストによる対談ページでは、自分と親、自分と子とのかかわりや人それぞれの子育ての本音が語られ、政界から医療、文芸、教育、スポーツなど多岐にわたる職業の方々ゆえに、個性的でバラエティーに富んだ生き方が発見できて興味深い。

いずれは大人に成長する子どもたちである。親が一方的に望むより、親の生活意識が子に反映し未来につながる。子どもの興味の幅を多方面に広げるためのエッセンスが網羅されている雑誌である。

（五味瑞之）

53号（1986年9月）
「バルセロナの旅」
特集ページより